



ブラジル特報

No.1631
2016年3月号

特集

「広がるブラジル料理」

- ・溢れる多様性を食べ尽くそう
- ・日本におけるブームを考える
- ・日伯の食肉貿易事情

あの町この町

ラモス移住地



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁



世界の未来を、ブラジルとつくる。

【Business innovation-1】

旅客鉄道事業に参画、400万人の市民の足を担う。
オデブレヒト・トランスポート社と共に、都市交通インフラを整え、都市の発展に貢献。

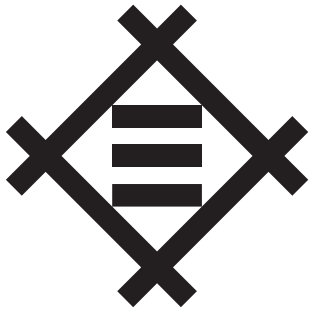
【Business innovation-2】

水力発電事業により、CO₂排出の少ないエネルギー開発を推進。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

【Business innovation-3】

ITを活用した教育事業で、次世代の人材育成に貢献。
オンライン教育事業のギーキー社に出資参画。一人ひとりの効果的な学びをサポート。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

目次

(あの町この町) ラモス移住地 [尾中弘孝]	3
(ブラジル・ナウ) リオ五輪とブラジル [梅田邦夫]	5
【特集】 広がるブラジル料理 ブラジル料理のはなし 溢れる多様性を食べ尽くそう [山本綾子]	6
【特集】 広がるブラジル料理 日本における ブラジル料理ブームを考える [大野亜紀]	8
【特集】 広がるブラジル料理 日本とブラジルの食肉貿易事情 [清水純一]	10
サマルコ社鉄鉱石鉱山 鉱滓ダム決壊事故について [特報編集部]	11
連載・ブラジル現地報告 リオオリンピック異聞 ブラジルでの事前合宿を 敬遠する日本選手団 [鈴木雅夫]	12
(日系企業シリーズ・第40回) ブラジルでの日立グループの歩み [池辺和博]	13
(ビジネス法務の肝) ブラジルの コーポレートガバナンスは最先端 [松田純一]	14
連載★税務の勘どころ⑥ ブラジル企業の輸出を支援する 関税関係特例措置 [ルイス・セナ]	15
(連載エッセイ) アンゴラから見たブラジル [名井良三]	16
(ウーマン・アイ) 北部のたくましき女性たち [村上裕美子]	17
(ジャーナリストの旅路) ある移民史研究者の死 [徳光一輝]	17
(連載文化評論) ブラジル料理文化に関する 超面白本を再読する [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
新刊書紹介	20
(びっくり豆知識) ブラジルワインはいかが?	20
協会からのお知らせ	21



写真家田中克佳の「表紙のひとこと」
サンパウロの中央市場。地元、パウリス
タたちにとっての台所で、新鮮な肉や魚、
野菜など何でも揃う。とりわけ色鮮やか
な果物はブラジル全土から集まり、アマ
ゾン産の珍しいフルーツや、日系移民が
もたらした梨やリンゴ、柿なども並ぶ。
(65年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93
年に退社後渡米し、独立。ニューヨーク在住。
www.katsutanaka.com)

ラモス移住地



ラモス移住地は、サンパウロより南へ約
750km、サンタカタリーナ州の中心部に位置し、
標高は900m、四季があって日本の香りのある
山里だ。直近の町は、人口4万人のクリチバ
ーノス市で、移住地から20kmのところにある。

今年で入植51周年となり、今までりんご「ふ
じ」、「日本梨」などの果樹、またニンニクや高原
野菜といった農作物生産のパイオニアとして地
域社会の農業に貢献してきた。

日伯文化協会では30年前より「さくら公園」
を造成しており、山桜、雪割桜、つつじ、ふじ、
などが、会館を囲むように20haほど植えられ
ている。毎年9月のさくら祭りには大勢の人に
花と食べ物と催しを楽しんでいただいている。ま
た、移住地内には長崎で被爆した移住者達が、州
の協力を得て作ったモニュメント、平和資料館が
あり、長崎より贈られた平和の鐘、パネルも見学
できる平和公園がある。2015年12月12日には
「長崎を最後の被爆地とする誓いの火」が長崎
より贈られ、大勢の市民が見守る中、分灯式が行
われた。一般の人をはじめ州内各地の学生の平和
教育に大いに利用されている。また、移住地は剣
道が盛んでブラジルでは唯一の剣道専用道場が
あり、40年前より現在まで青少年の人格形成、
村の団結、誇りとなって、村の精神的なバックボ
ーンになっている。3年に一度の世界大会には毎回
出場しており、ブラジル代表として個人戦では準
優勝一回、団体戦では常に上位に入っている。ま
た合同稽古、合宿なども行い、遠く他州からも剣
士が集まる。

今後の移住地の産業として、気
候的に恵まれた緑茶栽培を準備中
である。将来はお茶の里にしてゆ
く考えだ。すなわち、将来はお茶
フェスティバルなども行い、緑茶
の良さをアピールしたい考えだ。



尾中弘孝（セルソ・ラモス日伯文化協会会長）

南米大陸夢紀行



業務渡航は弊社へお任せ下さい!!

お客様のニーズに合ったプランをご提案します。

ブラジル視察

ブラジル駐在経験のあるOBの方への
ブラジルツアーの立案

ブラジル査証取得代行

日本への訪日観光ツアー

 **南米ルック**
株式会社 **ブラジル旅行社**
BRASIL TURISMO CO., LTD.

お電話でのお問合せ

03-3593-8787

〒105-0004

東京都港区新橋2丁目12-1 ランディック第3新橋ビル2F

営業時間【月～土】9:30～18:00

名古屋支店 TEL:052-565-1361

E-MAIL: info@brasil.co.jp

<http://www.brasil.co.jp/>

観光庁長官登録旅行業第1343号

日本旅行業協会 (JATA) 正会員

旅の専門店連合会会員



BRASIL  NOW

ブラジル・ナウ

リオ五輪とブラジル

1. はじめに

リオ・オリンピック・パラリンピック・イヤーの今年、ブラジルは政治の機能不全、深刻な不況、史上最大の汚職事件捜査の真った中にあり、言わば政治・経済・モラルの3つの分野で危機に直面し、大きな歴史的転機を迎えている。その上、感染症（ジカ熱）までも深刻な問題として急浮上し、ルセーフ政権は正に「統治能力」を問われる正念場を迎えている。

2. 感染症について

新年を迎え、「ジカ熱」の感染がブラジル国内のみならず、南米・北米大陸を中心に急速に拡大していることから、2月1日、世界保健機構（WHO）は、「国際的に懸念される公衆の保健上の緊急事態宣言」を発出した。「蚊の駆除」に関し、ブラジル政府は陸軍22万人を動員した取り組みを近々開始する。早急に成果の上がることを期待したいが、現時点では未知数である。リオ・オリンピック・パラリンピックには、選手団、メディア関係者に加え、何千人もの邦人観光客の訪伯が見込まれており、これらの方々が生ジカ熱等の感染症について理解を深め、自衛措置を講ずることが必要である。

「ジカ熱」は、蚊を媒体として感染し、自覚症状すらない例が多いが、妊婦が感染した場合における「新生児の小頭症」や「ギラン・バレー症候群」との関連が指摘されている。先天的感染症に区分される小頭症は、1月末までに404ケースが確認され、現在3,670ケースについて確認中である。なお、2月初め、米国で「性接触」を通じた感染の疑いも報告されており、更なる感染拡大が懸念される。

同じ蚊（ネッタイ・シマ蚊）一朝夕9時頃から午後3時頃まで活動）が媒介する「デング熱」にも注意を要する。昨年、ブラジルでは約165万人が感染し、800名以上が死亡している。昨年は、サンパウロ州で大流行した。今年も多くの州で昨年以上の感染が起これつつあり、首都ブラジリアでは、郊外の衛星都市を中心に今年1月だけで1073名が感染し、昨年1月の3倍以上の感染者数となっている。

「ジカ熱」のワクチン開発は始まったばかりであり、「デング熱」については、昨年末にワクチンが開発されたとの報道はあるが、市場にはでていない。従って、現時点で感染しない最善の方法は、「蚊に刺されない」ことである。その観点から、

長袖、長ズボンを着用して肌の露出度を減らすことが、まず重要である。

「虫よけ剤」に関し、役立つ点は次の通り。「虫よけ剤」の主要成分は2種類あり、①DEETという成分を含む虫よけ剤（例：OFF）の効果は2～6時間程度。国によって成分濃度の規制基準が異なり、日本は10%前後、ブラジルは6～14%前後である。②唐辛子から作られるICARIDINAという成分入りの虫よけ剤（例：EXPOSIS）の効果は約10時間。但し、ICARIDINA入りの虫よけ剤は、日本では販売されていない。

また、ブラジルのアパートやホテルには、多くの場合網戸はなく、電気蚊取り器（スーパーで購入可能）を準備することが望ましい。

3. オリンピック・パラリンピックに向けての対応

リオ・オリンピック・パラリンピックの期間中、大使館及びリオ総領事館にとっての最大任務は、①選手・役員、邦人観光客、メディア関係者の安全確保（テロ、強盗など一般犯罪、感染症）、②日本選手が実力を発揮できる環境づくり支援、③要人の受け入れの3点である。このため、大使館及び総領事館では、ブラジル及び日本の関係機関、他国大使館等との情報交換や連携を強化しつつあるが、今後、本番に向けて準備を加速する。

その一環として、3月9日、「リオ・オリンピック・パラリンピック連絡協議会」をリオで立上げる。この連絡協議会には、大使館、総領事館、政府関係機関の代表に加え、リオの日系諸団体代表、リオの日本商工会議所代表が参加する。そして、安全確保と日本選手団支援を念頭に、関連情報の共有と具体的協力について意見交換することとなる。

4. おわりに

リオの成功は、東京大会を主催する日本にとって極めて重要である。ブラジルにとっても、日本にとっても素晴らしいオリンピック・パラリンピックであったと評価されるものになりたいと思う。そのために、日本として万全を期したい考えであり、皆様の支援を心からお願いしたい。

梅田邦夫（駐ブラジル日本国特命全権大使）



●特集● 広がるブラジル料理

ブラジル料理のはなし 溢れる多様性を食べ尽くそう



山本綾子
（『ブラジル・カルチャー図鑑』
著者、在ブラジル）

先日、筆者が在籍するブラジリア連邦大学（UnB）観光学部修士課程のクラスメイトから、興味深い話を耳にした。普段は SESC（ブラジル商業連盟社会サービス）で教鞭をとっている彼女は、ブラジル政府が国賓や公賓など各国要人を招待する際に設ける晩餐会等のメニュー、さらには食を通じた外交戦略を研究していて、その内容には、労働者党（PT）のルーラ政権（2003～2010年）以降、大きな変化が起きているとのことだった。

カルドーズ政権（1995～2002年）以前は、長らくフレンチやイタリアンといったヨーロッパ系メニューを中心としていたが、ルーラ政権以降、ブラジル料理、しかもノルデスチ（北東部）やミナスジェライス州（以下、ミナス）などの郷土料理を積極的に取り入れるようになったという。自国料理を通じた外交戦略は、日本を含む多くの国で行われるようになって久しいが、ブラジルについても、そうした取り組みが比較的最近、PT への政権交代以降、採用されるようになったことは興味深い。

昨年（2015年）、ジルマ現大統領がアジアの某国大統領を国賓として招待した

際のメニューが、地元新聞で公開されていた。内容は、塩漬け干し肉のパイ生地包み、カボチャのカトゥピリチーズ（クリームチーズの一種）添え、ムケッカ・カピシャーバ（以下2. 参照）、白米、ファロッフア（味付けしたキャッサバ芋の粉）、ヴァタパー（海老やココナツミルクの煮込み料理）。デザートには、ボーロ・デ・ホーロ（北東部ベルナンブーコ州のグアバを練りこんだロールケーキ）、タピオカアイス、フルーツとピタンガ（フトモモ科の赤い小さな実）ソースとあった。まさに、ブラジル各地を網羅するような、郷土料理のオンパレードと言えるメニュー構成である。

ブラジルに詳しい読者の皆様はご存じのとおり、ブラジルの食文化ほどバラエティーに富んだ国は少ないかもしれない。日本の約23倍の面積をもつブラジルは、東西南北、気候が異なれば植生も違うため、当然、各地の地元食材は異なる。さらに、先住民に加え、1500年代から移り住んだ多くの移民から成り立つ多人種・多民族国家である。地域によって移民の構成は異なるため、ポルトガルはもとより、アフリカ、イタリア、ドイツなどの影響を受けた料理がそれぞれの地域で「ブラジル料理」として変貌している。

本号「ブラジル料理特集」では、まずはブラジル料理の大枠について、筆者が理解する以下の5つのポイントを紹介したい。

1. 「ブラジル料理＝肉」というイメージ

ブラジルの二大国民食といえば、肉のあらゆる部位を炭火で焼いて切り分けて食べる「シュラスコ」と、黒豆とやはり肉の各部位を一緒に煮込んだ「フェイジョアダ」だろう。ブラジル料理＝肉、という印象は、これらのワイルドな代表料理からきているのは間違いない。

ちなみに、シュラスコはブラジル南部が本場。田舎を駆け巡るヨーロッパ系移民のカウボーイ（ガウーショ）から続く食文化とされ、やはり南部に生産地が集積する国産ワインとともに食す。一方、フェイジョアダは、長らく、北東部のアフリカ系奴隷が主人一家に作った肉料理の余りものが起源とされてきたが、最近では、ヨーロッパ系の煮込み料理に影響を受け、リオデジャネイロで誕生したという説が有力である。

2. 実は魚介料理も豊富

シュラスコやフェイジョアダの次にブラジルの代表食として紹介されるのは、「バカリャウ（干し鰯）」料理かもしれない。古くからポルトガルの主要食材であった鰯はポルトガル系移民と共に伝わり、現在は北欧からの輸入品がほとんどである。塩干しされた保存食でもあるため、一年中、ブラジル全土のスーパーに置かれている。家庭ではクリスマスやイースターなどお祝い時に食べる習慣があり、その時期には値段は一気に高騰する。ブラジルでは、沿岸部を中心に魚料理は豊富で、特に、北部・北東部では鍋料理が郷土料理となっている。北東部バイ

ア州の「ムケッカ」は、魚介と野菜類をデンド（ヤシ）油とココナツミルクで煮込んだ食べ応えのある鍋料理で、リオやサンパウロのレストランでも提供されている。リオ州に隣接するエスピリトサント州では、ココナツミルクは使わず、デンド油の代わりにオリーブ油を使い、ウルクンという食紅を加える「ムケッカ・カピシャーバ」が地元料理である。北部のパラー州やアマソナス州では、アマゾン川の川魚と野菜類をシンプルに煮込んだ「カルデイレダ」が有名で、透明なスープは日本人の胃に優しく、疲れ気味の旅行者には好評の一品である。

さらに、世界最大級の湿原や川が伸びるマトグロッソ州などの内陸地帯では、タンバキやドーラードなど巨大な川魚が肉よりも食べられ、サンタカタリーナ州など南部沿岸部では魚の他、カキが特産となっている。

3. ブラジル郷土料理の代名詞、ミナス料理

1、2だけでもお分かりの通り、ブラジル料理はバラエティーに富み、甲乙つけ難い魅力に溢れるが、種類の豊富さと内容の奥深さで一歩秀でていると度々言われるのがミナス料理である。

豆と豚肉、野菜を煮込んだ「トゥトゥ」や、鶏肉とオクラの煮込み料理「フランゴ・コン・キアーボ」、豆、キャッサバ芋の粉、ベーコン、卵などを炒めた「フェイジョン・トロペイロ」などに代表されるミナス料理は、数々の食材を使った絶妙な味で、ビッフェ形式のレストランは日本人にも大変な人気である。

ミナスが本場のチーズを練りこんで焼

るミナス・スイーツも欠かせない。

4. 世界が注目するアマゾン料理

昨年12月、パラー州の州都ベレンは、ユネスコのクリエイティブシティ（食文化部門）に認定された。2004年に始まったこの認定事業では、文学、映画、音楽、芸術など計7分野に秀でた都市が世界中から選出される。ベレンは、2014年のサンタカタリーナ州フロリアノポリスに続き、ブラジルの食文化部門の認定都市となった（なお、その他の過去の認定都市は、クリチバ（デザイン）、サントス（映画）、サルヴァドール（音楽））。

アマゾン料理の中でも特にパラー料理は、他のブラジル料理と一線を画すオリジナル色溢れるものである。先住民から受け継いだ食材は、例えば、キャッサバ芋の絞り汁から毒素を抜いた黄色いスープ「トゥクピー」や、噛むと舌がしびれる野菜「ジャンブー」など、他の地域では入手できないものばかりで、熱帯雨林とアマゾン川により隔離された独自の食文化を形成している。サンパウロからベレンまで直行便で3時間半を要するが、国内外の有名シェフや料理研究家が珍しいアマゾンの食材を求めてベレンを訪れている。ベレンに行かれる方には、トゥクピーベースにアマゾン川の巨大ナマズとジャンブーが入った鍋料理「カルデイレダ・パラエンセ」を是非試して頂きたい。

5. ブラジル料理に変貌する移民料理

移民国家ブラジルは、国内各地に各国移民の食文化が色濃く残っている。特に、人種のるつぼと言われるサンパウロでは、イタリア系、アラブ系、アジア系などに加え、小さなコミュニティに潜入すれば、アルメニア系、アフリカ系、ボリビア系の食も味わうこともできる。

南部のリオグランデドスール州やサンタカタリーナ州では、イタリア系、ドイ



軽食を売る新移民のボリビア人
（サンパウロ市内ボリビア人街／筆者撮影）

ツ系が圧倒的に多く、それぞれの国の建築様式の町並みが残る観光地では、母国料理をだすレストランがいくつもある。また、パラナ州クリチバあたりでは、ポーランド系やウクライナ系移民も多く、透き通るような肌の白人が地元屋台でピロシキを売っている。

特筆すべき点は、ポルトガル系やアフリカ系、イタリア系、日系など、特に1世紀以上の移民の歴史をもつ国々の料理は、すっかり「ブラジル料理」に変貌、昇格しているという点だ。移民またはその子孫の方々からすると、母国の料理であってブラジル料理ではない、と叱られそうであるが、筆者のような外国人にしてみれば、煮込み料理のように柔らかいパスタや、あんかけソースたっぷりの焼きそば（Yakissoba）は、それぞれイタリア料理、日本料理というよりは、地元食材を使ったすっかりブラジル流にアレンジされた「ブラジル料理」である。

多くの移民を受け入れてきたブラジルは、人間のみならず、あらゆる文化を寛容に受け入れ、国としての魅力を高めてきた。こうしたダイナミズムを食文化から感じることも、ブラジル旅行の醍醐味かもしれない。

ここ数年、ブラジルが身近になってきたこともあり、東京都内を中心にシュラスコを扱うブラジルレストランは増えてきたが、残念ながら、それ以外の料理にはなかなか出会えない。本場のシュラスコはもちろん味わう価値ありだが、ブラジルを旅する方には、ぜひ各地の郷土料理も貪欲に堪能して欲しい。現政権の外交の武器にもなっている「ブラジル料理」。この国の多様性や懐の深さを理解するには、料理も欠かせない要素と言えるのだ。



トゥクピーベースの「カルデイレダ・パラエンセ」(パラー州ベレン／筆者撮影)



ピエロギを売り歩くポーランド系
美女姉妹（パラナ州クリチバ／筆者撮影）

日本における ブラジル料理ブームを考える

2016年1月、いよいよリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックイヤーの幕開けだ。南米初のオリンピック開催国となったブラジル。今年は更に、様々な角度からブラジルに注目が集まることになるだろう。そして、ブラジル料理にも。サッカーブラジルワールドカップ開催以来、ブラジル料理が紹介される機会が増え、認知度も高まってきたが、ここ数年、都心ばかりか北は札幌、南は博多、那覇まで日本全国各地における、シュラスコレストランの台頭は目覚ましいものがある。

増え続ける シュラスコレストラン

都内には、2014年に開催されたサッカーブラジルワールドカップや今年のリオデジャネイロオリンピック開催のあたりもあってか、シュラスコレストランの数が、右肩上がりの活況を帯びている。たとえば、シュラスコレストラン一号店を22年前に青山に出店した、国内外に100を超えるレストランを展開する外食企業、株式会社ワンダーテーブルが経営する「バルバッコア」。BSE問題などの苦境も乗り越え、東京、大阪、地方都市に店舗数を増やし現在8店舗を展開。さ



「バルバッコア」のサラダバー

らに、今後も増やす計画があるという。サンパウロのバルバッコアは1990年にオープン。サンパウロで生活していた人にはなじみ深い、高級シュラスコ店の一つだが、日本のバルバッコアは、ワンダーテーブルの現会長が、サンパウロを訪れた際、このシュラスコに日本での可能性を強く感じ、その時通訳をしていた日系ブラジル人と、このレストランで出会ったパッサドル（テーブルを回って肉をサーブする人）を連れ帰国。バルバッコア青山本店をオープンしたという歴史がある。

なぜ、シュラスコが日本で、ブラジル料理として認知され、成功への道を歩んだのだろうか。筆者が調べた限りでは、日本における最初の本格的シュラスコレストランは1991年開店の「バッカーナ」であるが、全般的傾向としては、それから10年ほどはシュラスコ店舗数が漸増していったものの、2005年前後にブームが沈静化し、シュラスコ店舗数も減少に転じた。それがまた急増に転じたのは2010年前後からである。では、現在何軒ほどのシュラスコレストランがあるだろうか。大手レストラン検索サイトに、「シュラスコ」をキーワードにアクセスしてみると、50以上のレストランが、さらに、検索の範囲を全国に広げてみると、100を超えるレストランがヒットした。もちろん、この検索サイトに載っていないブラジル系のレストランが、群馬や愛知、静岡などブラジル人が多く住む地域も含め、相当数存在するが、ここでは、日本におけるシュラスコレストランのブームについて考えてみたいと思う。



大野亜紀
(フリーアナウンサー・料理研究家)

1月末筆者は、前出の「バルバッコア」新宿店を訪ねた。取材の約束は15時。ランチタイムも終わり、静かにまかないを食べる従業員がいる店内に通されるかと思っていたが、「少々お待ちください」と店頭で待たされた。

待っている間に見た光景は、おしゃれをした都会の女性たちが、満足げに会計の列を作る姿。ランチの値段は、サラダバーとシュラスコ食べ放題に、ドリンクバーとデザート食べ放題がついて、一人約4000円。話題のレストランで、トレ



シュラスコ（部位はピカーニャ）

ンドのシャワーを浴びながら、美味しい料理にデザートまで満喫して、女子トークに花を咲かせる……。彼女たちの満足度は、会計をしている姿からも十分に理解できた。ちなみに、この店のディナー料金は食事だけで約6000円、飲み放題にして約8000円（デザートは別料金）という料金体制。決して安い金額ではない。しかし、取材に応じてくれた、バルバッコア高輪店の支配人の山田氏によると、8店舗すべてが黒字、広い店内が満席になることもめずらしくないとのこと。

日本人にとって、シュラスコの魅力はどこにあるのか……。前出の山田氏によると、シュラスコの魅力は、健康志向の人にも満足してもらえる野菜や惣菜の食べ放題。農業大国ブラジルを象徴するような色とりどりの野菜や惣菜の数々。こ

れらを家庭で用意するには、大変な労力とコストがかかってしまう。そして、あのダイナミックな肉の塊。パッサドルが、串に刺した様々な肉を好きなだけ切り分けてくれる。このパフォーマンスだけでも、非日常を十分に楽しめる。まさに、胃袋も心も満たされるというのだ。

ブラジル料理教室を ひらいて

ところで筆者は、縁あって、ブラジルから帰国した2015年秋から自宅でブラジル料理を主とした、料理教室を開くことになった。<https://cookstep.cookpad.com/schools/9254>これは、料理検索サイト最大手のクックパッドの子会社が運営する料理教室で、全国ネットの強みを活かして、ユーザーがサイトを利用して、教室やレッスンメニューを検索して、自分の好みと時間にあったレッスンの予約をネットで行うというもの。レッスンの公開前の準備に要する作業は、ネットでのページ作り、料理写真の撮影等。フォーマットがあるとはいえ、料理教室というより、webデザイナーか、パソコンの入力作業のアルバイトをしているのかと思えるほどの、パソコンとの格闘の日々を過ごし、ようやくアップされる。ここから、クックパッド料理教室のサイトを通して、全国に自分の教室の情報が流れる。すぐに予約など入るわけではないのだが、サイトを見た人の数が、（初めてアップをすると、目立つところに、宣伝されることもあって）あっという間に1000を超えた。この宣伝効果には正直驚いた。その時用意したメインのメニューは、フェイジョン（ブラジルの代表的な家庭料理の豆の煮込み料理）とムケッカ・カピシャバ。ムケッカは、玉ねぎやトマト、白身の魚や魚介類を重ねて行くだけの、とても簡単で見た目も豪華な、日本人の味覚にも合うメニュー。しかし、ブラジル料理＝ムケッ



料理教室の様子

たが、結局、一番反響が大きかったのはシュラスコメニューだった。

ブラジルの節目の 思い出と重なるシュラスコ

ところで、筆者のシュラスコの思い出といえば、初めて観光でブラジルを訪れた8年前、日系ブラジル人の知人が、ようこそブラジルへ！の気持ちを込めて連れて行ってくれたのが、シュハスカリア（シュラスコレストラン）だった。また、6年前から生活をはじめたサンパウロで、親しくなったブラジル人の友人が家に招いてくれた時も、自宅に詠えてあるグリルでシュラスコをごちそうしてくれた。他の友人からも、自宅でシュラスコを振る舞われた。本帰国前に、また別の友人が連れて行ってくれたレストランも、シュハスカリアだった。シュラスコはブラジル人にとって、特別な日のごちそう、おもてなし料理なのだ。日本は、リオデジャネイロオリンピックの次の開催国として、東京オリンピックをものにした。決定の瞬間、筆者もサンパウロの住まいで、テレビ中継をみながら歓喜した。その時、世界中に発信された「おもてなし」のことば。おもてなしの表現の仕方はちがっても、大切な人を喜ばせたい、感謝を伝えたい、そんな心の交流の一つが料理と食事。料理をつくり振る舞う。食事を共にする。これは万国共通の、愛情表現なのだろう。明るくて、優しく、熱くて、ちょっとアバウトな……気のいいブラジル人。これからもブラジルで過ごした時間と出会った人たちに感謝をしながら、ブラジル料理とブラジルの魅力を日本で広めて行きたいと思う。



料理教室の様子

日本とブラジルの食肉貿易事情

清水純一
(農林水産省農林水産政策研究所
上席主任研究官)



ブラジル産食肉の競争力

食肉はブラジルを代表する輸出農産品である。表1のように、世界の食肉輸出量の中で高いシェアを誇っており、全体としてブラジルは世界でトップの食肉輸出国と言える。

このように、食肉が高い競争力を持つにいたったのには二つの要因がある。第一は、大豆とトウモロコシの生産量が国内で飛躍的に伸び、家畜用に安い飼料を利用できるようになったことだ。この点を見込んで、米国タイソンフーズがブラジルへ進出しているほどである。

第二はパッカーと呼ばれる民族資本の世界的な食肉加工企業が発達したことだ。代表となるのがJBSとBRF(ブラジル・フーズ)の2社で、両社とも米国を含め国際的なM&Aを展開し、100カ国以上に製品を輸出している。JBSは1953年に設立され、2007年には米国スウィフト社を買収し、タイソンフーズを抜き、世界最大の食肉メーカーになった。牛肉が中心の会社だったが、ビルグリムズ・ブライド(米国)を買収するなど、鶏肉部門にも積極的に進出している。BRFは2009年にブラジル国内鶏肉パッカー1位のペルジゴン(Perdigão)社と2位のサジア(Sadia)社が合併して誕生したブラジル最大の鶏肉パッカーである。同社も世界展開をしているが、近年はアブダビに工場を建設するなど中東への進出を重視し、更にタイやインドネシアでもM&Aを実施している。これらの

大規模パッカーは豊富な資金力と高い技術力で低い生産費を実現している。

日本の食肉輸入事情とブラジル

ブラジルが世界一の食肉輸出国とすれば、日本は世界一の食肉輸入国と言えるかもしれない。表1のように、鶏肉と豚肉が世界一、牛肉は3位の輸入国だ。しかし、日本市場で鶏肉以外はブラジルのシェアはほとんど無い。2015年の日本の輸入(速報値)をみると、牛肉はオーストラリアと米国の上位2カ国で92%に達している。豚肉は米国、カナダ、デンマークの上位3カ国からの輸入が全体の68%になる。世界で高い輸出シェアを持つブラジルの牛肉と豚肉が日本でほとんど輸入されていないのは、ブラジル国内での口蹄疫の発生を理由として、サンタカタリーナ州産の豚肉を例外として、日本が生鮮肉の輸入を禁止しているためである。牛肉に関しては、過去にBSE感染牛の存在が確認されたため、2012年12月から加熱処理した肉も禁止していたが2015年12月に解禁している。

ただし、牛丼チェーン店の「すき家」を展開しているゼンショーホールディングスが米国産牛肉をブラジルJBSの子会社である米国スウィフト社から購

入しているように、「ブラジル産の牛肉」ではないものの、実質的には「ブラジル資本の牛肉会社」から輸入されている例がある。JBSもこの点は割り切っていて、日本にはブラジルから直接輸出できなくても、米国やオーストラリアの子会社から輸出できれば良いと考えているようだ。

これに対して、ブラジルの鶏肉は日本の輸入量53万トンうち41万トン(77%)を占め、シェアが1位(77%)と日本市場において存在感を発揮している。この背景には、2004年に中国とタイで鶏インフルエンザが発生し、生鮮肉の輸入が途絶えた時にブラジル産鶏肉が間隙を埋め、以後シェアを拡大してきた事実がある。しかし、これをもって輸入鶏肉市場でブラジルが1位と考えるのは早計だ。なぜなら、タイと中国は鶏肉を加工した調整品の輸出にシフトし、輸入を解禁された後も生鮮肉の輸出に重きを置いていないからだ。2015年に日本は鶏肉調整品を41万トン(2285億円)輸入している。数量ベースでは生鮮鶏肉に及ばないが、金額では鶏肉の1584億円を上回り、単価の高い商品である。調整品は数量ベースでタイから全体の57%、中国から42%を輸入しており、この二カ国でほぼ全量を占めている。日本の居酒屋チェーンも食材の鶏肉を輸入調整品に依存して場合が多い。2013年にタイは生鮮鶏肉の輸入禁止を解除されたが、生鮮鶏肉の分野でブラジル産といまさら安値競争をするつもりはなく、今後とも付加価値の高い調整品の輸出に注力していくことであろう。

	ブラジルの食肉輸出		日本の食肉輸入	
	シェア(%)	順位	シェア(%)	順位
牛肉	19.1	2	9.4	3
豚肉	8.1	4	20.9	1
鶏肉	34.0	1	10.0	1

表1 食肉貿易の日伯比較(数量ベース、2014年)
資料: USDA, Livestock and Poultry: World Markets and Trade, October 2015.

サマルコ社鉄鉱石鉱山 鉱滓ダム決壊事故について

『ブラジル特報』編集部

©fatoonline.com.br



2015年11月5日、鉱山大手ヴァーレ社とBHP社(英豪資本)が50%ずつ出資した合併会社サマルコ社のミナスジェライス州マリアーナ市鉄鉱石鉱山の鉱滓貯蔵ダムが決壊し、大量の汚泥が近隣の住宅街を飲み込み、ドセ川を下って流域から大西洋岸まで泥色に変えてしまった。この凄まじい環境破壊事故に関しては、様々な報道がなされ、大量のニュース情報が放出されたが、編集部として、改めて、ファクトを追究してみた。在ブラジルの環境専門家からも教示していただいたが、随分と情報の質に差がある、というのが編集部の率直な感想である。

1. 犠牲者数

当初は、死者行方不明者合わせ20名以上とか、30名以上とかの数字が乱立したが、総合週刊誌ヴェージャ(2015年12月30日号)によれば、少なくとも16名が死亡となっておりグローボTV報道では、死者17名、行方不明2名、となっている。マリアーナ市ばかりでなくドセ川流域住民も含めた被災者総数は、グローボTVによれば32万1千人となっている。

2. 流失汚泥の数量

泥流の量についても、諸説あり、多くのメディアが三千四百万~四千万立方メートルと報道しているが、ヴェージャ誌(同上号)によれば、「六千二百万立方メートル、オリンピック競技用プールに換算すると2万5千個分」の汚泥が流失した、となっている。世界各国で起きた類似の鉱滓貯蔵ダム決壊事故における流失量は数十万から数百万立方メートルであるから、今回のサマルコ社事故が放出した汚泥の量が桁違いの、膨大な量であることは間違いないが、正確な数量はよくわからない、というしかない。

3. 被災面積、喪失水源、環境復元の可能性

120の水源地が泥流で覆われ、農地などの有効地が少なくとも1,500haも全滅し、ドセ川に棲息する80種の魚類のうち、少なくとも12種が絶滅した、土壌回復など破壊された環境が元に復元されるには、楽観的な見方でも、最低10年は必要だろう、と報道しているのは、ヴェージャ誌だ。

4. 流失汚泥に有害物資が含まれているのか

当事者サマルコ社のHPによれば、流出した鉱滓は主に砂泥で構成されており、有害物資は含まれず無害である、と一貫して主張している。

ブラジル政府関係機関の公表情報はどうなっているか、いくつか見てみよう。CPRM(鉱山エネルギー省/ブラジル地理サービス)は、流失汚泥による川の汚染は確認されなかったと発表し、魚が大量に死んだのは汚泥が川の透光と酸素濃度を下げたことが要因である、との結論を下している。環境省傘下のANA(ブラジル水機構)によれば、ドセ川の水質は事故前と同じであり、汚染は確認されず、従って、リスクはない。

Embrapa(農牧研究公社)は、泥流被害を受けた10カ所の土壌調査を行ったが、有害なレベルに達する重金属は検出されず、土壌の堆積物は、農作物の発育に適さないと報告した。農業活動に必要なカリウム、マグネシウム、カルシウムが不足していると指摘しているが、土壌の酸性度が変化し、土壌硬化(質の違う土が層となり分離)の可能性がある。

独自調査を行ったブラジリア大学研究者グループによれば、決壊事故の被害地域において10種の有害物質調査を実施

し、ヒ素・マンガン・鉛の3種につき、基準を上回る数値が検出された。ただ、同数値は被害地域(鉱滓到達エリア)以外でも検出されたことから、本事故の流出鉱滓が原因かは不明とも述べた。

国連(特別調査委員)も、重金属・有害物質が検出されたと主張したが、この調査の元データは、エスピリトサント州水道局のもので、精度も信頼性も高くないといわれている。

5. 環境への影響

科学的に信頼できる複数のデータに裏付けされた、ダム決壊事故による有毒物質の流出、環境汚染は確認されていない。但し、現在視覚で確認される植生及び生物への影響を、泥の大量流出を受けた一時的な被害、と理解してよいか、は、意見が分かれる。

サマルコ社の説明では、鉄鉱石の選鉱過程で化学品は使用されておらず、このプロセスにおける汚染はないと理解される。また、日本の鉱山公害では、硫化物が空気中の酸素に反応して有害物資が発生したが、ミナス州で採れる鉄鉱石には、硫化物が含まれていない由だ。他方、ダムに貯められていた鉱滓に雨水が混ざり鉱物が溶け出して重金属が堆積した可能性は否定できない。

また、堆積した汚泥で農地が喪失したことによる農業への影響は小さくない。Emater-MG(州農村技術支援公社)は植林による土壌回復策を提案し、Embrapa(農牧研究公社)も施肥や酸性土壌の中性化等の対策を検討している。

リオオリンピック異聞 ブラジルでの事前合宿を 敬遠する日本選手団

鈴木雅夫

(サンパウロ新聞社編集局長)



8月からリオでオリンピック大会、パラリンピック大会が始まるというのにブラジル国内では一向に盛り上がらない。テレビや新聞ではオリンピックのスポンサー企業がコマーシャルを流して煽ろうとしているが、ブラジル経済が悪化している上、政治は相変わらずペトロプラスを舞台にした汚職ラバ・ジャットがマスコミを賑わしている。その影響でオリンピック関係の予算が削減され、いろいろなところに影響が出そうだ。その上、公共料金が相次いで値上げされ、毎日どこかでデモが繰り広げられており、とてもスポーツの祭典を楽しもうと言う余裕はないというのが本音だろう。それに加えて、2年前のサッカーW杯とは異なり、開催地がリオという限定された地域ということも大きいだろう。

それでも、1月にブラジル国内用に売り出されたオリンピック開会式の入場券は即売し、ブラジルのメダル獲得が期待されるサッカー、バスケット、バレー、ビーチバレー、柔道、水泳などのチケットはすでに売り切れているという。カーニバルが終わればそれなりに盛り上がりは見せるのだろう。

昨年来、日本の政府関係者、次回(2020年)の開催地である東京都をはじめ出場競技団体の関係者がリオをはじめサンパウロなどを足しげく訪問している。昨年3月の段階で当時サンパウロ総領事だった福嶋教輝氏は、オリンピックへ出場する日本の競技団体の多くがサンパウロ市内の施設などを下見していたことから「リオに入る前の事前合宿はサンパウロが多くなるのではないか」との見方をしていた。

ところが、最近の情報によると、日本の出場競技団体のほとんどは事前合宿を米国で行うことが明らかになり、現時点ではサンパウロで事前合宿を行うのは数団体にとどまっている。サンパウロ総領事館に確認したところ、「我々も情報がなく、どの団体がサンパウロで事前合宿を行うかは把握していない」という。日本のオリンピック委員会に聞いても各競技団体が独自に動いているため把握できていないのだ。

なぜ、サンパウロが敬遠されたのか理由は不明だが、関係

者は次のような説明をしてくれた。リオオリンピック委員会では、リオをはじめブラジル各地のスポーツセンターやクラブなど使用可能な施設を紹介している。ところが、設備が不十分なうえに賃貸料が高く、貸し切りではなく他の国との共用になることが敬遠された理由の一つだという。また、治安の問題もあり、それなら、ほとんど時差のない米国なら季節的に夏になり、リオの気温と大差がないと判断したようだ。

サンパウロの主要日系団体は、日本チームがサンパウロでの事前合宿を期待してただけに「我々もぜひ協力したいと考えていたのに残念だ」と肩を落としている。そんなとき、サンパウロのフォーリャ紙が中国の動向を大きく報じた。

その報道によると、中国は同国のオリンピック委員会が一丸となり、サンパウロで事前合宿を行う。サンパウロ市内のファリア・リマ大通りにある5星ホテルを貸し切り選手、関係者など350人が宿泊し、すぐ近くにあるピニエイロスクラブを使って事前合宿を行うという。米国に次いで世界第2位のメダル獲得数を誇る中国だけに意気込みが違う。

同委員会は同クラブとは1年半前から交渉。当初中国側は400人規模で使用することを考えたが施設や会員の使用も考え350人に減らし、15種目の選手、関係者が使用するという。このクラブを7月22日から8月15日まで使うのだが、その使用料総額が1日56万レアル、同紙が試算した合計金額は350万ドル。既に、全額を同クラブに払いこんでいるという。

また、同紙によると、イギリスはメインの事前合宿所をペロオリゾンテ市内のミナス・テニスクラブに決め、8種目の選手が合宿する。一方、米国の主要種目はリオのフラメンゴ・サッカークラブでの事前合宿を決めているという。いずれも、それぞれの国のオリンピック委員会が交渉にあたっているという。中国を含めこの3か国が使う施設の一部改修費を含めた費用を負担しており、現地も恩恵を被っている。

2年前のサッカーW杯の時、日本チームはサンパウロ州イツー市に拠点を置いたものの地元の日系社会のみならずブラジル社会との交流もせず壟盛を買ったが、今回も単にリオでの試合だけに主眼を置いているのだろうか。もう少し考えたほうがいいと思うのは筆者だけだろうか。



ブラジルでの 日立グループの歩み

池辺和博

(日立南米社 president)



日立グループは㈱日立製作所を核とする、約千社、32万人の従業員から構成される企業グループである。正直なところ、規模が大きく多岐な業界に跨り事業を行っているので、誰も全体像を把握できていないのでは、と訝てしまう。日立南米社(Hitachi South America Ltda.)は㈱日立製作所のブラジル拠点、かつ日立グループにおける南米の地域統括会社であるが、その前身の歴史は古く戦前にさかのぼり、本社がインドにつづく2番目の海外拠点として、1940年にリオに駐在員事務所を設けたのがそれである。

ただし、ブラジルに大きく踏み込むことになった時期はそれから約30年後の、1972年空調事業の進出である。何はともあれ現地生産ということで、当時まだ工場もまばらであったSao Jose dos Campos市に7.5万坪の土地を取得、翌73年工場建屋を完成させた。当初は空調市場も黎明期で競合も少なく、基幹部品の内製化を進めたことも功を奏して、事業環境も良好だったが、ほどなく80年代後半からハイパーインフレに突入する。都合4回のデノミを経験し、資金繰りには大変苦労したと聞く。しかし90年代前半には、大きな利益を上げることができたというから驚く。そのカラクリはこうだ。年初に大きな在庫を抱え、次第にインフレで売価が上昇していく。製品の簿価は低いので、年度末になるほど、利益率が上昇していくというもの。その後、94年にリアルプランが導入され、ブラジル経済は息をつくが、空調事業は「在庫経営」の成功のジレンマから脱却できずに、急激に業績が落ち込んでいった。

浮き沈みを経ながらも、空調事業が成長を継続し、2013年に40周年式典を開催できたのも、日本から何度かのイエロー(レッドも)カードを受けながらも、時の現場経営者が踏みとどまったこと。有力な現地設営業者を招



Hitachi Kokusai Linear 社 Santa Rita 工場

日して、現地パートナーとの絆を深めていったことではないだろうか。空調事業のマザー工場が静岡県清水市にあり、サッカーで交流が深められたことも幸運だった。技量に長けたブラジル人従業員を清水に送り、ハイブリッド化した清水チームは東海リーグで上位の位置に上り詰めた。ラモスやアルシンドがJリーグで活躍する前の話だ。

直近で最も経済が好調だった2011年より(過去形で語るのが哀しい状況だが・・・)、日立グループの歴史は新たなステージに入る。現地企業のM&Aを決行するなどして、多くの事業部門がブラジルに進出してきたのだ。日立国際電気が放送局向け通信設備メーカーのLinear社を買収、日立建機が米資本のJohn Deere社とJVで工場を建設、情報事業部がITサービス会社を、直近では交通事業部が伊資本アンサルド社を傘下に収める等の動きが加速した。現時点では下表の12社がブラジルで活動し、周辺の南米国に活動の場を広げようと模索している。

会社名(設立年順)	業 態	設立年
Hitachi South America Ltda.	地域統括、マーケティング・営業支援	1940年
Hitachi Air Conditioning Products Brazil Ltda.	空調冷凍機製造・販売	1972年
Hitachi High-Technologies do Brazil Ltda.	電気製品、工業機器、通信機器、輸出入、販売	1972年
Hitachi Data Systems Computadores do Brasil Ltda.	ストレージ 製品販売、サービス	1992年
Hitachi Sistemas Médicos do Brasil Ltda.	医療機器販売、サービス	1999年
Clarion do Brasil Ltda.	カーオーディオ/ナビ販売、サービス	2000年
Hitachi Koki do Brasil Ltda.	電動工具販売、サービス	2010年
Hitachi Kokusai Linear Equipamentos Eletrônicos S.A	放送用送信機器製造、販売	2011年
Deere-Hitachi Máquinas de Construção do Brasil S.A	建設機械製造、販売	2011年
HITACHI-MYCOM Manutencao e Solucoes Ltda.	コンプレッサ保守サービス	2012年
Hitachi Rail Brasil Ltda.	交通事業の企画、マーケティング	2013年
Hitachi Consulting Brasil Servicos De Consultoria Em Gestao Empresarial Ltda.	ITサービス	2014年

昨年に続き、今年もブラジル経済は非常に厳しい年が予想されているが、上記空調事業の例の様に、苦しい時期を耐え忍んで頑張っこそブラジル事業の成功があるということをグループ会社に訴えながらこの難局を乗り切り、日立グループの技術と力を結集して、ブラジルの社会イノベーションに貢献したいと考えている。

ブラジルの コーポレートガバナンス は最先端



松田純一
(弁護士。松田総合
法律事務所所長)

連載
ビジネス
法務の肝

世界的に企業統治（コーポレートガバナンス）の新しいトレンドが見られる。日本では、昨年6月東京証券取引所が社外取締役の選任や株主との対話促進等、73の原則から成る「企業統治指針」を適用、株主や投資家の多様な意見を取り入れて経営の透明性や効率性を高めようとしている。「社外取締役を指名するか、そうでない場合は理由を説明せよ（comply or explain）」という開示義務は、1992年に英国が最初に導入した当時としては革新的な規範であり、取締役会長とCEOの職務分離もこの時に導入されている。

「社外取締役」と並ぶ重要な施策として「上場企業におけるガバナンスの強化」が挙げられる。この分野ではブラジルの例が良く知られており、実は、ブラジルはコーポレートガバナンスでは最先端の国のひとつである。

証券取引所における新たな上場規則

2000年、サンパウロ証券取引所（BM&F Bovespa）は、既存市場と上場規則が異なる複数のセグメント（レベル1、レベル2、ノボ・メルカード）を開設、この際、コーポレートガバナンス基準をレベル1、レベル2、ノボ・メルカードの順に強化した。最もガバナンス水準の高いノボ・メルカードとレベル2を比較すると、ノボ・メルカードの株式は普通株に限定（レベル2、レベル1は普通株と優先株）、タグアロング権（注：ある株主が株式を売却する場合、他の株主も同じ条件で同じ買い手に売却する権利を有する旨の契約。大株主に少数株主が追随できるため少数株主保護の性格を持つ）の付与は、ノボ・メルカードは普通株の100%、レベル2は、普通株100%と優先株100%といった点が主な違いである。

一方、下記の上場規則はノボ・メルカード、レベル2に共通しており差異はない。**浮動株**：発行済株式の25%以上。**兼務禁止**：会長と社長あるいはCEOの兼務は3年以内。**取締役会の義務**：敵対的買収に関する報告。**取締役会構成**：最低5名、その内20%は任期2年までの独立取締役。**財務諸表**：英文表記。**年次株主総会**：開催義務あり。**追加公表情報**：有価証券の取引と行動規範政策。

また、レベル2、レベル1の違いとして、レベル1では、

取締役会構成：最低3名の取締役（法律通り）。**取締役会の義務**：規制なし。**財務諸表**：法律通り。**タグアロング権の付与**：普通株80%（法律通り）、というように基準が下がる。

企業価値向上に寄与

これら規則に従う企業は従来型の上場企業と異なり、上場当初より企業の信頼性を保証するため投資への誘引効果も高い。特に海外投資家の資金呼び込みにはローリスクをアピールする必要があるが、コーポレートガバナンスに関する審査基準を設けた市場を開設したブラジルは、経営実務改善を果たしただけでなく外国投資呼び込みでも成功し、2014年に証券取引所で取引される株式の50%は外国人投資家が占めるに至った。

更に、ガバナンスが高い企業株で構成された理論的パフォーマンスを表す「ブラジル・コーポレートガバナンス指数」も公表されている。また、2004年から2013年までのIPO151社の内訳は、ノボ・メルカード：74.2%、レベル2：13.2%であり、上場規則のガバナンス基準が厳しいセグメントへのIPO数が多い傾向にある。

攻めのコーポレートガバナンス

2015年、日欧の有名企業で深刻な不祥事が露見した。コーポレートガバナンスと先進国が否かには明らかな相関関係はない。ガバナンスには様々な要因が絡むため、唯一の正しい定義もなく、その適用は企業が自らの状況を踏まえて工夫すべきである。しかしながら、取締役会、監査役会、経営者、株主（投資家）、従業員という複数の集団の体制の在り方と関係性において、その主眼は内向きのリスク低減や不祥事防止ではなく、「企業の持続的な成長」と「中長期的な企業価値の向上」にあると言える。昨今話題の「攻めのガバナンス」である。倫理・透明性の欠如、ガバナンスの弱さが招く不祥事が企業存続を左右する時代の真っ只中であって、開かれたガバナンスが実現できるかどうかは、最終的には関係者の意識改革に帰着すると思われる。

ブラジル企業の 輸出を支援する 関税関係特例措置



ルイス・セナ
(トムソン・ロイター・ブラジルの貿易部門の専門家。カンピーナス・カトリック大学院卒。グローバル企業の運営管理の改善を支援)

近年ブラジルは、自国企業が国内市場に依存することなく、その製品とサービスの提供を国際市場にも拡大するよう様々な努力を重ねている。ブラジル政府は、輸出が企業の販売戦略の一部となるよう①例えば通商協定を結ぶための新たな相手国又は経済ブロックの開拓②業務コストを下げるための煩雑な手続の削減といった、法律及び制度面の基盤整備に努めている。とりわけ企業に租税及び物流コスト面でのメリットを与えるための関税関係特例措置の改善を進めている。

AEO制度導入国の物流が迅速化

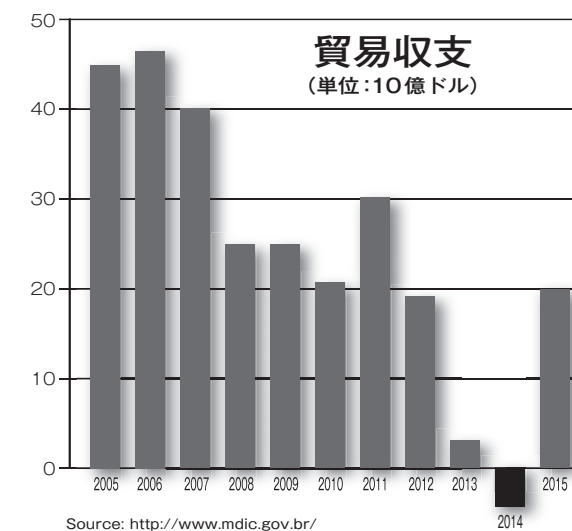
上記の物流に関連する改善例として、日本も導入している認定事業者制度（AEO制度）のブラジルでの導入があげられる。これにより国際パートナーとして認定されたブラジル企業に対しサプライチェーンの安全が確保され、AEO制度導入国への物品の出入りが迅速化される。

他に特筆すべき点は、通常の輸出入制度の一般規則の適用を受けない関税関係特例措置と呼ばれるもので、これは外国からの物品の輸入又は国内の物品の輸出に対する課税に関する一般規則（輸出入一般関税制度）の例外措置及び税関行政における特別扱いの適用を定めたものである。

ブラジル政府は輸出奨励策としての関税関係特例措置の範囲において、その利用を促進し、また企業の生産コストを引下げるために業務量の削減を進めている。輸出奨励策とは国内市場及び輸入品として取得し、生産工程に投入された後に最終的に製品として輸出される物品に対し税務上の恩典を付与することである。

ブラジル関税法の長所のひとつは、実質的に市場の全分野に適用が可能なこの関税関係特例措置の多様性にあり、それにより企業は生産から輸出を実現するまで、税と各種料金の納付による資金の流出を回避することができる。ブラジルで活動する企業による関税関係特例措置の利用が国際市場への製品供給を支えるとともに、次のグラフから分かるとおり、2014年を除き近年の貿易収支の黒字基調を可能にしている。

当措置より得られる利点は、生産面に多大の効果をもたらす国際市場における販売を有利にすることである。国際



市場で競争力を持つことを望むブラジルの企業にとって、自社の生産形態により適した1つ又は複数の特例措置を利用することが必須となる。

企業の効率的運営がカギ

当然のことながら、関税関係特例措置により付与される利点を享受できるように、ブラジル政府は各企業に事業の効率的な運営を要求する。つまりは、製品の取得、生産及び出荷の過程における効率的なオペレーション及び管理を行うことが基本的に要求される事項となる。そのため、企業は貿易業務を管理するだけでなく、それによる利益の可視化を可能にする組織的な対応策を追求し、さらには各企業の他部門、例えば経理、物流、資材、販売、税務等との連携強化を目指す必要がある。

そして、結果として各企業では内部管理が強化され、迅速かつ安定した政府への情報提供が可能となり、事業運営上のリスクを減らし、様々な法令への遵守が可能となる。ブラジルにおいて、トムソン・ロイターは企業に対して関税関係特例措置の運用・管理に関する総合的サポートを提供することで、企業が適切な管理手法に基づき正確な決定を下し、貿易部門の他部門との一体化を可能にする情報を提供し、企業が利用する特例措置の活用による利益の最大化に努めている。

アンゴラから見たブラジル



名井良三
(みょうい・りょうぞう)
(前アンゴラ大使。東京外大 社会・国際貢献情報センター 副センター長)

アンゴラを訪れたブラジル人が「アンゴラは近い」と言っていた。そうであろうか。アフリカと南米が近いはずはない、そう思うのが自然であろう。

以前、総領事としてブラジルのベレンに赴任する際、長いジャーナリスト経験を有する和田昌親氏から著書『逆さまの地球儀』を頂いた。見方を変えてみる重要性を説いたものである。日本を中心に置く世界地図では、南米は東端、アフリカは西端、互いに遠く離れているかに見えるが、見方を変えて、大西洋を中心にすれば両大陸が遠くないということが見えてくる。両国間にはアンゴラ航空の直行便が飛んでいる。多くのブラジル人やアンゴラ人が、容易に、そして頻繁に、日々両国間を往復している。

「Without Angola, there is no Brazil」、17世紀のイエズス会宣教師の言葉である。その頃のアンゴラは、ブラジルへの最大の奴隷供給地であった。アンゴラの首都ルアンダ近郊の沿岸に奴隷博物館がある。そのあたりから奴隷が運ばれていったのであろう。博物館には、奴隷となった人数は300万人にのぼるとの記載もあった。多くの労働人口を提供させられたアンゴラであるが、ブラジルの中では不幸な形ではあるが国造りに関わったのである。

1975年アンゴラは独立を果たした。その独立にあたってのブラジルの態度はアンゴラを強く印象付けた。国家承認に向けて他国に先駆け迅速に対応したのである。世界が冷戦構造の中にあり、またブラジルがガイゼル大統領の下で軍事政権の真っ只中にあったという背景の中での大変興味深い決断である。

独立は僅か40年前のことである。私が学生時代にポルトガルにいた1970年代初期にはアンゴラはまだ国ではなく、ポルトガルの海外州という位置付けであった。独立闘争の中にはあったが、独立までにはその後まだ数年間を要した。独立への道は長かったのである。国家承認40周年を迎えた2015年11月、シコティ・アンゴラ外相はブラジリアを訪問した。偶然にも、私が同地を訪れた数日後で

あった。同外相は、スピーチの中で、ブラジルの素早い国家承認を高く評価した。アンゴラは今でもブラジルの恩を忘れていない。

大西洋を挟んでブラジルとアンゴラを結ぶ大陸間海底ケーブル敷設という壮大な事業がある。これは、ブラジルの事業ではなく、ブラジル・アンゴラの共同事業でもない。アンゴラの事業である。NECが請け負った事業であり、ルアンダでの調印式には私も出席した。豪華な雰囲気の中での調印式であった。財力があり、やることも大きいのがアンゴラである。大きな事業も独自に進める力も意欲もある。近い将来、アフリカと南米を結ぶ海底ケーブルがアンゴラの力によってブラジル北東部フォルタレーザに届くことになる。両国は一層近い関係になっていきつつある。

地デジについても言及しておきたい。地デジ日伯方式ISDB-Tはブラジルと日本の協力によって広く南米に普及している。これをアンゴラでも普及させようとする計画は実現に近いところまでいった。しかし、最終的には予想外の結果となり奏功しなかった。最後の最後までわからないのがアンゴラである。

この地デジを除けば両国関係は概ねうまくいっている。アンゴラには、中国の進出が顕著で、特に大型工事では中国人の姿が目立つ。そのような中で、中国のように労働者までブラジル人で賄うというようなことはないが、ブラジルからも企業の参入は少なくない。同じ言語という利点を生かし、アンゴラ人社員を自国ブラジルで研修させ、人材育成という面で貢献している企業もある。アンゴラ最大の国立病院アゴスティーニョ・ネト病院等への医療協力のほか、職業訓練等も実施されている。また、カンピーナス大学ではかなりの数のアンゴラ人留学生が受け入れられている。地理的にもそして言語の面でも、更には文化的にも近い国ブラジルとの関係はこれからも強化されていきそうだ。日本企業もブラジル経由のアンゴラ・ビジネスということが考えられるのかもしれない。



北部のたくましき女性たち

ブラジルの企業や団体に日本のワカモノを1年間の研修目的で派遣する「ブラジル日本交流協会」の事務局員として、4年弱のブラジル滞在を終えて3年。結局毎年サンパウロに「帰聖」している。出張等で未踏の州はあと8州まできたものの、知れば知るほど深入りしてしまい、人のSaudadeもあって、また足を運んでしまう。このまま一生終わりそうな気すらしており、ブラジルとは関係のない夫には恐縮しきりだが、現状まだニコニコついてきてくれるので、もう少し巻き込まれていただくことにする。

今回北部を周る中で最も印象的だったのは、アマゾン川の河口ベレン市の対岸の島々。船でわずか20分の地域は未だに水上家屋が主で、対岸から見るとマンハッタン島のようなベレンのビル群との景色の違いに衝撃を受ける。ところが見た目の印象とは裏腹に「教育の高度化」が進んでいるのが見てとれる。訪れた地域の公立校の生徒は小中高で約700名おり、今や4割がより良い仕事を求めて大学に進学すること。地方の進学率と都市化を象徴しており、大変興味深かつ

た。

地域では、たくましく働く女性を実に多く見かけた。たくさんの子を持ち、彼らの将来のため、自分も働き、家計を助ける。農作業や手工芸だけでなく、英語を覚えてガイドをするなど、生きるためにできることは何でも前向きにやってみる、という姿勢が伺え、同性としてとても刺激を受けた。

サンパウロでは今年派遣した研修生とも再会でき、採用面接時は留学の志望動機もロクに言えなかったワカモノが、ブラジル仕様の充実した顔立ちをしていることを嬉しく思ったが、今回の旅を経て、ブラジルの原風景が残る奥地への派遣を増やしたいという思いに駆られた。

1981年の初派遣から35年。80年代は1～2割であった女性の研修生は、ここ20年ほどで6～7割を占めるようになった。奥地への女性派遣は男性よりリスクを伴うが、男女共働きが当然の時代である今、明るく力強く生きる女性たちと奥地で過ごす1年は、女性としてのキャリアを考えるうえでも、とても有意義なものになるに違いない。

ジャーナリストの旅路

ある移民史研究者の死

徳光一輝

(産経新聞記者として、2007年と11年にブラジル取材)

当協会の個人会員で、アマゾン移民史研究者の野口敬子さんが2015年12月20日、兵庫県姫路市で他界した。87歳。ブラジル取材でお世話になった者の一人として、ここに紹介したい。

1928年、和歌山市出身。大阪府立図書館の司書を経て、81年、和歌山市民図書館に公立図書館で唯一の「移民資料室」を開設したことで知られる。その後は、戦前にアマゾンを開拓した「日本高等拓殖学校」の卒業生（高拓生）の聞き取り調査を続けた。渡伯は30年間で約25回に上る。なぜ、そこまで続けたのか。

「私もアマゾンへ渡っていたかもしれないからです」

52年。戦後の生活苦は続いていた。大阪・淀屋橋の駅に立て看板があった。「きたれアマゾンへ」。移住説明会へ参加した。結局、移住までには至らなかった。

戦後のアマゾン計画移民は「棄民」と呼ばれた。ブラジル最奥地ロライマ州のタイアーノ移住地では、移民の男性が粗末な家屋でインディオの妻と住んでいた。日本人かと尋ねると、「日本人だ」と答えた。地球の反対側から持参した昆布を手渡すと、袋の「昆布」という漢字を読んだ。

「私はね、その人のことを思うと、戦後移民のことを書けない。私も加害者の一人のような気がするのです」

インタビューの手法や史料の扱いは厳しかった。半面、筆まめで、長電話と手紙、ファクスを好んだ。肩書きこそ研究者（しかも在野の）だったが、その姿勢は「ジャーナリストの旅路」を行く者が目指すべき、そのものだった。

ある女性記者がブラジルへ赴任する前、挨拶にいくと、「あなた、アマゾンで日系人取材するなら、幅飛びを練習しなきゃ」。アマゾン河でボートからボートへ飛び移る際、落ちるとワニに食べられるとの理由だった。自身も、世界遺産・姫路城の公園で幅跳びを練習していたという。

一人息子の琢磨氏によると、死因は大動脈解離。前日まで年賀状を80枚書くなど一人で自立し生活していた。「新聞受けがあふれている」など異変の知らせで琢磨氏が東京から駆けつけると、室内で前のめりになって倒れていた。

論文のみ、著書はない。最後までまとめようとしていたのは、高拓生の歴史だった。「どうしても確かめたいことがある」と、6月の訪伯を目指し2カ月前に旅券を新調したばかりだった。葬儀の遺影は、旅券の写真が使われた。

ブラジル料理文化に関する 超面白本を再読する

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

料理エッセイ本
『バナナの国』の表紙



国民の生活レベルが向上すれば、食欲を満たすためにだけに食う段階から、食文化を楽しむ段階に“進化”するのは、洋の東西を問わず、共通である。リアルプランで超インフレ経済構造が解消されたブラジルは、1990年代末から生活全般に余裕が出てきて、伝統的郷土料理や移民が持ち込んだエスニック料理、さらには新たな“融合型”など、多様な食文化を楽しめる環境が整ってきている。

となれば、英語でいうガストロノミーに関する本が多数出版されるようになるのは当然である。グルメ・料理レシピ本では最大手の SENAC 出版社は、2014 年現在、256 点の料理本を出しているが、同年上半期の売上部数は 1.4 万部と前年同期比 96%増となった由だ。

こうした“追い風”のなか同年 6 月に刊行された『バナナの国』と題する、料理レシピ&食文化エッセイ集は、快著である。エッセイ部分が、多様なブラジル食文化物語となっており、読書界で話題になったものだ。この度改めて再読して、“面白いなあ！”を連発しながら読み進むことになった。著者は J.A. ディアス・ロベス。総合雑誌「ヴェージャ」ローマ特派員を務め、エスタド・デ・サンパウロ紙などで健筆を揮ってきたベタラン記者だけに、文章は軽妙にして洒落だ。というわけで、この面白本的一端をメモしてみよう。

例えば、ピザ。ブラジルは数の点では世界で 3 番目のイタリア移民導入国であるから、イタリア系の多い南部では移民が急増した 19 世紀後半にはピザ屋が何軒も繁盛していたのだらうと思っていたが、ブラジルで最初に開店したピザ・レストランは、サンパウロ市プラス区の Santa Genoveva で、オープンしたのは 1910 年であった、と。意外と新しいのだ。

ピザが大衆化すれば、口語表現のなかにピザ関連のイディオムが出来上がってくるが、最近よく使われる“terminar(acabar) em pizza”。直訳すれば、結果としてピザに終わる、とは、不正を働いた人間（政治家）が罰せられることもなく、その不正をうやむやにしてしまう、という意味だ。この用語が初めて使用されたのは、サッカーのパルメイラスの内紛に関してで、スポーツ新聞が 1960 年代に使い始めた由だ。

あるいは、ブラジルにおいてはシリア・レバノン料

理を代表するペイルーチ。アラブ・パン（無発酵パン）に薄切りビーフ、トマト、レタス、モツアレラチーズ、香草オレガノなどを挟んだサンドイッチだが、今日では、ブラジル中どこでも食べられる。このアラブ・サンドは、実は、本国にはなく、サンパウロのレバノン移民が営むアラブ料理屋で開発されたものだ。これまた意外だ。どこの店で、いつ、となると諸説あるが、1945 年から 50 年のあいだで、サンパウロ市パライズ区の店が発祥地のようである。

シュラスコについては、食い放題のホディジオ方式が登場したのは 1960 年代だが、サンパウロ以南のいくつものシュラスコレストランでほぼ“同時発生的”に始まったというのが、この著者の見立てである。また、ブラジル人が愛してやまない部位ピカーニャ（ランプ・トップ）が一般化したのは 1980 年代以降にすぎない、との指摘もびっくりだ。肉専門店ウェッセルが、アルカトラ（ランプ肉）とピカーニャを分けて売り出したのが 1960 年で、サンパウロの有名焼肉店 Dinho's がピカーニャを初めてメニューに載せたのは、1973 年だったというから、つい最近の“近過去”のことだ。すなわち、ブラジル人のピカーニャ大好き現象は昔からの伝統的なものではなかったのだ。

ブラジル国民のソウルフードと認識されているフェイジョアーダについては、奴隷料理起源説を俗説として退け、民俗学者カマラ・カスクードが主張していた南欧料理起源説を補強するような事例（南フランスのカスレ、ポルトガルのコジドなど）をいくつも述べながら、現在のスタイル Feijoada Completa が出来上がったのは 19 世紀末だろうと推測している。

また、最近はこの高級レストランでも見られる、食材ごとに別の鍋で煮込む“洗練型フェイジョアーダ”を最初に始めたのは、リオのシーザーパークホテルで 1980 年代初めのことだった。サンパウロのルバイヤート・チェーンがこの複数別鍋スタイルをよりレベルアップし、全国に伝播していったのだ。と、これまた、つい最近のことにすぎない。

英国の歴史学者ホブズボームは「伝統は創造されるものだ」と喝破したが、ブラジル料理・食文化は、まさに“創られた伝統食”の見本市であるといえよう。

フィッチ・レーティング社による ブラジル国債格下げ

2015 年 12 月 16 日、格付会社のフィッチ・レーティングス社（以下、フィッチ）は、ブラジルの格付を BBB- から投資不適格（ジャンク級）の BB+ に一段階格下げを行い、格付見通しをネガティブとした。同社は、10 月 15 日にも BBB から BBB- へ引き下げていた。また、大手格付機関 3 社（S&P、ムーディーズ、フィッチ）の中では、S&P（9 月 9 日）に続き、2 社目による投資不適格級への格下げとなった。

フィッチによると、投機的水準である BB+ に格下げした理由は、①予想よりも深刻な景気の後退、②継続的に悪化している財政状況、及び③政治の不透明感の高まりにより、拡大する債務を安定化させるために効果的な政策を実施することができないこと、を反映したものである。また、フィッチは見通しをネガティブとしたが、これは継続する不透明感、及び経済、財政、政治に関するダウンサイドリスクを踏まえたものである。信頼を取り戻し、経済、財政、債務に関する見通しを改善するための、的確で時宜を得た政策の実施が、国内の混乱によって困難となっている。

ルセーフ政権の支持率

2015 年 12 月 19 日、主要メディアにおいて、大手世論調査機関ダタ・フォーリャ社によるルセーフ政権支持率の最新の調査結果が報じられている。ポイントは以下の通り。尚、今回の調査は、16～17 日に全国 172 市の 2,810 名の有権者を対象に行われた。

①ルセーフ政権を「良い・最も良い」と評価する回答は、前回調査時（11 月 25～26 日）の 10%から今回 12%まで回復した。16～24 歳の調査対象者によるルセーフ政権の評価は依然として低く、「良い・最も良い」と回答したのは僅か 5%であったが、60 歳以上では 13%から 21%に、45～54 歳では 8%から 15%に増加した。

②他方、今回の「良い・最も良い」の回答率（12%）は、2011 年 1 月の第一次ルセーフ政権発足以降で三番目に低い水準であり、1992 年のコロール大統領の弾劾手続き終盤の同回答率（9%）と比べても大差はない。

③ルセーフ政権を「悪い・最も悪い」と評価する回答は、前回調査時の 67%から 2 ポイント低下し、本年 6 月の調査時と同率の 65%に戻した。同政権を「普通」と評価す

る回答は、前回調査時と同率の 22%であった。

④ 2016 年 2～3 月に実施されると予想される、下院本会議での大統領弾劾に関する表決について、下院議員は弾劾に賛成すべきと回答した率は 60%、反対すべきは 34%であった（今回初めて質問を実施）。「ルセーフ大統領は辞任すべき」と回答した率は、引き続き過半数を超えているものの、前回の 62%から 56%へと低下した。

⑤クーニャ下院議長の議員資格剥奪については、82%が剥奪すべきと回答した。

熱帯フルーツ輸出久しぶりに好転

2 月 1 日付けヴァロール・エコノミコ紙によれば、ブラジルのマンゴとブドウの輸出量の 90%を産出する東北伯サンフランシスコ河中流域が久しぶりに活気を取り戻している。同地域で生産するマンゴの約 50%、ブドウは生産量の約 35%、が輸出向けとなっているが、2015 年の輸出量（数量ベース）は、ブドウの場合 21.3% 増加、マンゴは 17.5% 増えた。

これはドル高レアル安のおかげであるが、輸出者業界団体 Valexport によれば、2015 年はもっと輸出を増やすことができたはずであった。というのも、多くの生産者がこれほどドル高に振れるとは予想していなかったため、輸出の準備ができておらず、ブラジル国内消費用に、収穫量を年間で平準化したからだ。

2016 年は、ドル高を最大限に活かすため、ヨーロッパの需要が伸びる 8～11 月に、収穫時期を集中させるべく準備中である。この時期は、ヨーロッパでの端境期に当たり、良い価格で販売することができるのだ。

楽観的な見方によれば、同地域の今年のフルーツ輸出は大幅に伸長するだろう。というのもブラジル国内市場でも果実の品質管理は厳しくなっており、国内向け果実を輸出向けに振り替えることは十分可能である、とみられるからだ。

今年度の穀物生産予想

2 月 5 日付けヴァロール紙によれば、CONAB（国家配給公社）の最新予想では、2016 年度の穀物生産は 2 億 1,027 万トンとなっている。マトグロッソ州における降雨の影響から、1 月の予想数量 2 億 1,047 万トンよりも 20 万トン下方修正しているが、2015 年の 2 億 767 万トンを上回っているため、現時点では史上最高の穀物生産量となる見込みである。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆ 『ブラジル知的財産法概説』 (ヒサオ・アリタ、二宮正人共著、 大嶽達哉日本語訳監修)

元 INPI(国家工業所有権院)長官のアリタ弁護士と二宮サンパウロ大学教授による、知的財産法の包括的かつ実践的な概説書である。前半において、歴史的背景を踏まえ、具体例、例えば、植物育種権、商標・意匠など工業所有権、営業秘密の保護などについて実際の解説を施し、後半は、工業所有権法、著作権法、コンピュータ・プログラム保護法などの条文邦訳で、法律用語例が索引に付されている。

(信山社 2015年9月 281頁 4,200円+税)
増補ポケット版
『リアル・ブラジル音楽』
(ウィリー・ウーパー著)
2010年8月に刊行された『リアル・ブ

ラジル音楽』の文庫版であるが、新しく書き加えられた第7章において、2015年ブラジル音楽最新情報がコンパクトにまとめられている。サンバ以前、サンバ誕生からムジカ・カイピラ、ボサノヴァ、トロピカリア、マンギ・ビート、フォホー・モデルノ etc まで、ブラジル音楽の歴史が要領よく書き込まれ、ブラジルの地理や歴史、文学、映画までカバーしたミニ・ブラジル音楽文化事典的な文庫本だ。

(ヤマハミュージックメディア 2015年11月 285頁 950円+税)

『ラテンアメリカ 21世紀の社会と女性』 (国本伊代編)

『ラテンアメリカ 社会と女性』(1985年)、『ラテンアメリカ 新しい社会と女性』(2000年)と15年毎に、最新研究成果を織り込んできた、女性研究者による共同研究の最新版が刊行された。これ自体が歴史(30年!)といえる快挙である。ブラジル編は、三田千代子教授による「ジェンダー格差克服の挑戦」で、家族形態の多様化、女性の教育水準向上、女性の政界進出について、社会学者らしい深い解釈を論述している。

(新評論 2015年12月 392頁 3,800円+税)

『ショーロはこうして誕生した』 (A・G・ピント著、貝塚正美訳)

1978年にファクシミリ版で再刊されるまで忘れ去られていた超稀覯本(初版1936年)が日本語で読めるとは、訳者の眼光に感謝あるのみ。奴隷制も帝政も廃止され共和政がなんとか確立した19世紀末から20世紀初めにかけての、首都リオにおけるベル・エポック期のサロン音楽シーンが克明に記録されている。ラジオが普及する前の、ショーロの演奏フォームが確立された頃のライブ音楽劇現場を活字を通じて追体験できるのだ。

(彩流社 2015年12月 310頁 2,800円+税)

『音の棲むところ 4』(宮沢和史著)

月刊誌ラティーナに長年連載されてきた歌手宮沢和史の人気コラムをまとめたもの。2007年からの8年分が一冊となっているが、いくつかの章のタイトルを列記すると、「ブラジルで暮らす日系人の「生きる迫力」」、「ブラジルは僕の血となり肉となった」、「南米の日系社会に学んだこと」というように、歌手が如何に、ブラジルの音楽や文化を吸収して血肉化していったか、を、読者は読み取ることになる。作詞家=詩人の文章は読みやすい。

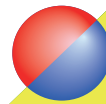
(ラティーナ社 2016年1月 181頁 2,000円+税)

!!「びっくり豆知識」!!

ブラジルワインはいかが？

「ブラジルワインはいかが」と聞けば、多くの人は、「カシャサ(ピンガ)の間違いではないですか」とか「ビールの間違いじゃないの」と言われそうである。カシャサはウオッカに次いで第2の蒸留酒だと言われているし、ビールの生産量ではブラジルは、中国、米国に次いで堂々第3位である。何と日本の3倍弱なのである。ところが最近、ブラジルもワインの輸出に大いに積極的なのだ。ブラジルのワイナリーの大手の Salton 社の日本の代理店の Drink of Brasil Co. Ltd. によれば、フランスのスパークリングコンテストのロゼ部門で金賞を受賞したり、日経プラス1の「何でもランキング」では、白ワイン部門で第3位、赤ワイン部門で第8位となった。Wine of Brasil というホームページを見ると、2014年には、輸出額992万ドル、輸出量265万リットルで、対前年比84%と大きな伸びを示している。ワイン生産量からみると、南半球ではブラジルはアルゼンチン、チリ、南ア、オーストラリアに次いで第5位を占める。ここで、ブラジルワインのおさらいをしておこう。ブラジルのワインの歴史を見ると、ポルトガル人の植民の時代に遡るが、イタリア人の移民により1875年頃から本格的に始まった。生産地の分布を見ると、6つの主要地域が浮かび上がる。リオグランデ・ド・スル州のセーハ・ガウシャ、カンバーニャ等4地域、

サンタ・カタリーナ州のプラナウト・カタリネンセ地域、東北部ブラジルのサンフランシスコ河中流域である。ホームページでは代表的なワイナリー24社が紹介されている。その中には、Salton社の他に、すでに日本市場に進出している Miolo 社(代理店 株式会社池光エンタープライズ)や Aurora 社(代理店、株式会社イマイ)がある。対日輸出が成功するか否かは、ブラジル側の官民挙げての輸出努力によるが、リアル安、日本におけるブラジルレストランの急激な増加と良い風が吹きつつある。高級ワインを輸出しようという動きも見られる。ワインの輸出価格を2010年と14年で比較すると、テーブルワインで1リットル当たりの単価は、2ドルから3.2ドルへ、スパークリングワインは、2.8ドルから4.6ドルとなっている。昨年、日本のワイン輸入で、チリがフランスを抜いて堂々1位になった。筆者がサンティアゴに駐在していた1988年には、チリのボトルワインの対日輸出額は、14万ドルにも達していなかったが、チリ人の輸出業者の継続的な熱意と努力、チリ輸出振興局(プロチレ)の献身的な支援・協力が今の地位を勝ち得たのである。2014年のブラジルワイン(スパークリングを含む)の対日輸出額は50万ドルを超えている。ブラジルならできる。フレー、フレー、ブラジル。(S)



日本ブラジル中央協会 からのお知らせ

協会イベントのご案内

お申し込みは、協会ホームページのお申し込みフォームより、お願いします。

▶ 第3回 日本ブラジル中央協会 会員交流懇親会

会員同士が知り合い、そして楽しく語り合える“会員交流懇親会”を本年度も開催します。会場は、シンプルで気取らないフランス料理のお店“ビストロ イルドレ”です。会員の皆様、是非ご参加ください。今後も3~4ヶ月に一度の開催を考えております。

日 時：2016年3月17日(木) 18:00~

場 所：Bistro Ile De Re
東京都渋谷区渋谷2-15-1 渋谷クロスタワー1F

参加費：男 性 6,000円 女 性 5,500円

▶ 近田 亮平氏 講演会

アジア経済研究所の「ブラジル経済動向レポート」の執筆者でもあります近田氏より、中長期的な視点から、政治経済動向について講演していただく機会を設けました。講演は二部構成とし、前半で、マクロ政治経済動向、後半で、(ブラジルの社会・経済をより理解するための)宗教(キリスト教)団体の動向、について話していただきます。

日 時：2016年4月8日(金) 16:30-18:00

場 所：米州開発銀行アジア事務所会議室
内幸町富国生命ビル16階
アクセス：都営地下鉄三田線「内幸町」駅 A6出口直結
JR「新橋」駅 日比谷口徒歩6分
東京メトロ千代田線・日比谷線「霞ヶ関」駅 C4出口徒歩3分

「ブラジル特報」は、一部有名書店の店頭でも入手できます。

日本ブラジル中央協会

春期ポルトガル語講座 受講者間もなく募集開始！

初心者〜上級者まで、レベルに合わせ、4クラスをご用意しております。これからポルトガル語を学びたいとお考えの方、覚えたポルトガル語を生かし、スキルアップをしたいとお考えの方、是非、ご参加ください。

講座のお申し込み・詳細については、協会ホームページをご覧ください。



——皆様のご入会を、心よりお待ちしております——

法人・個人  

新規会員募集中

会員数 2016年2月現在
法人会員 約120社
個人会員 約270名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることを是非ご検討いただければ幸いです。

【会員特典】協会会報「ブラジル特報」の無料配布、
会員価格にてイベント(講演会、ポルトガル語講座等)、会員交流懇親会に参加できます。

年会費

入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) 以上 (1口以上) 以上

お申込みはこちらから 日本ブラジル中央協会公式HP

<http://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会

検索


BRASILICAGRILL
CHURRASCARIA

ブラジル バーベキュー食べ放題
+ ビュッフェ

¥5,400 (税抜き/tax not incl.)

ALL
YOU
CAN
EAT

食
べ
放
題

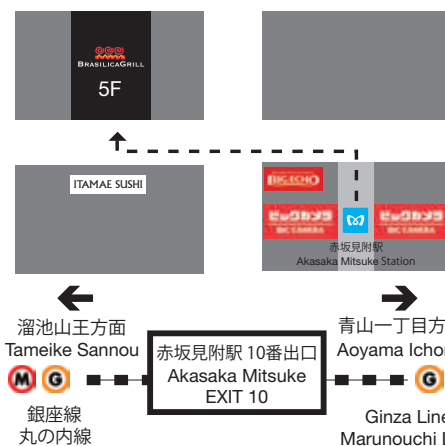
予約:
www.brasilicagrill.com

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル5階
Tokyo-to Minato-ku Akasaka 3-10-4 Akasaka Getsu Sekai Bldg. 5F

赤坂見附駅
徒歩2分

赤坂駅
徒歩6分

永田町駅
徒歩6分





スペイン・中南米との架け橋として20年 スペイン語・ポルトガル語の イスパニカ

www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

通訳 翻訳

ビジネスから文芸まで経験豊富なプロがクオリティの高いサービスを提供

取扱い言語: スペイン語・ポルトガル語
英語・フランス語・ドイツ語
イタリア語・ポーランド語

語学スクール

初心者はもちろん、中・上級者向けコースも充実の溜池山王教室

www.hispanica-academia.org

・通学
・通信添削
・オンライン ※ポルトガル語は通学のみ

書籍の執筆・編集

赴任、出張にはこれ！

安心のカナ発音
英語付き。



ミニマム文法やミニ辞典も掲載。
三修社刊

中南米の情報提供

スペイン通信社EFEの情報をもとに
中南米の最新ニュースを日本語で

・中南米経済速報（週刊）
・政治・治安情報 “CRONICA”
（月～金の毎日）

企業語学研修

ニーズに合わせた効果的な研修
粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に
導く語学学習をとことんサポート。実
践的なコミュニケーションを最大限ひ
きかずレッスンをアレンジします。

(有)イスパニカ 〒107-0052 東京都港区赤坂 2-2-19 アドレスビル1F（銀座線・南北線「溜池山王」駅8番出口前）

Tel.03-5544-8335 Fax.03-5544-8336 hola@hispanica.org



本場ブラジルの濃厚アサイーで、 おいしく健康な毎日を。



フルッタフルッタはパラ州のトメアス農協CAMTA
からフルーツ原料を直輸入しています。

製品のご注文は ☎ 0120-265-726

受付時間:
平日9:00~18:00
(土日祝休)

ホームページからも
ご注文いただけます

フルッタフルッタ

検索

www.frutafruta.com

Stay Sustainable!



フルッタフルッタはアグロフォレストリーを通して環境と
経済が共存するグリーンエコノミーを実践しています。

“生きた”ポルトガル語が 身に付く。



ブラジルでビジネスや生活をする上で欠かせないのがポルトガル語です。

BrAsia(ブレイジア)では、赴任前と赴任後の語学研修を提供します。

講師任せにはしない!現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia(ブレイジア)の研修プログラム

■ 赴任前ブラジル・ポルトガル語短期語学研修(30~50時間)

現地着任前に最低限の準備を! →国内ですべきは独学の準備と自己紹介、タクシー移動もスムーズに!

※企業への講師派遣(首都圏・名古屋地区・京阪神)も可能です。

■ ブラジル異文化概論&マネジメント講座(半日~1日)

ブラジルの文化、ビジネスの課題を解決! →労働争議は日常茶飯事?各分野の専門講師が課題を紐解きます!

ブラジルで学ぶ! 短期語学研修プランもご用意!

■ サンパウロ市内提携先での現地語学特訓コース(3~6か月)

キャンパスライフは不要! できればマンツーマンで語学力を一気に高めましょう!

株式会社漢和塾 BrAsia(ブレイジア)事業部 〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-7 銀座大栄ビル5階 TEL 03-4360-8627

お問い合わせはコチラ!

E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com>



BrAsia代表
小川善久

大阪外国語大学
ポルトガル・ブラジル語学科
1987年卒業
この数年、年に2~3回のペースでブラジルに出張。サンパウロはじめ複数の主要都市を訪問。「事件は現場で起きている!」との考えで、研修会社の責任者としてブラジルを奔走中!



新日鐵住金

あらゆるものづくりを支え、
いつの時代も未来を拓く素材の主役、鉄。
その大いなる可能性を極限まで追求し、
日本と世界の発展、そして豊かな社会の創造に
貢献することが、私たち新日鐵住金の使命です。
世界最高水準の技術とものづくりの力で、
もっとグローバルに、もっと先進の鉄へ。
「総合力世界No.1の鉄鋼メーカー」をめざす、
私たちの挑戦に限りはありません。

www.nssmc.com

限
り
な
い

鉄
の
未
来
を
め
ざ
す
。



世界の鉄へ

しんにつつすみきん